



當落は問題でないが

所調得票何れが勝か

結果は政友に若干の強味か

所得調査委員の改選期は来馬の努力によつて郡北方面の十六日で剩すところ僅かの郡部から相當酬えらるる三日に過ぎない石城は政友のあるらしく準郡部で平四、民政三の定員に止まる町に關係の深い加藤丈夫氏推薦候補に對して野崎派か

押立て

あつたが今日となつては夫れも立消えとなり確實に無競争であるから當落は素より問題でないが何人が最高票を制するものか且つ又その得票は

黨勢力

の基準にも見られるので自然兩派の消長にも關する爲め相當に興味もなされてゐる、結果は云ふ迄もない開けて見れば判らず世評の區々を免かれぬ

大体當

らんと云ふ所は平町では柏原幸次郎氏に優勢と見られ再選の猪狩庄平氏また超然たる所に怒るべき實力があるであらう次に阿部唯次郎氏は縁關係に有力筋が多く野崎滿藏氏は戦術に長けた南船北

有力筋

が

出馬せ

る赤津修一氏との取組では地元若千の強味はありそうだが小名濱方面に喰ひ入つてゐる赤津派の奮闘は認められる結果を得るだらうと云はれてゐる

通觀し

来たれば何れに甲乙を附することは困難であるが最高票は百を出づる二三十票と想像される柏原氏あたりかと唱ひられ平均得票は政友派に一位の優勢でなからうかと觀測されてゐる

好問村の所要土地

六百圓弱で解決か 着工を待つ失業者を見ては地主も無理難題な態度なき模様

地主も無理難題な態度なき模様

平水道の擴張工事準備は諸放棄とする所に材料の購入も極めて順調に進捗してゐるが難物は好問村上の原野内に於ける貯水池その他約三千坪の用地買収で目下委員の交渉中である右土地自覚があるので

交渉中

である右土地自覚があるので

觀世流の素

來月九日田町大貞にて

素

平町の好話家によつて組織される觀世流の平々會では來十一月九日(第二日曜)同町新田町大貞方に於て秋季素談會を催し同會の名士

石城各濱のサンマ

水揚實に百七十萬 混多返す一雙平均十萬尾余

本縣の好漁も茲五六日の見込

漸次活況に向いた秋刀魚のらしい豊漁でその漁獲左記好漁は既報の如くであるがの如く去十二月午後石城各濱に水揚された同漁は近年にも珍に達したので當日の平町魚夫飯場名金之助方維夫石

俳句

秋ピクニツク (四) 満壽莊主人 泣いて来て子も飯食ふや 稻の中 乙 由 ぼのあとをつけて行くと大きな豚小倉がある山ふところ 路はそこできつて居る 蜻蛉や一踏きわまる養豚所

割合に

賣行き良好で午前九時頃までに全部整理された尚ほサンマの漁場は目下岩手縣釜石沖が盛漁であるが茲五六日を以て

金華山

から本縣沖に初游の漁を見られるものと豫想されてゐる

十三才頃から

未忍るべき 大工の弟子

悪い手癖

四倉蘭市場に於ける十二日の取引は四百二十二貫五十二圓の出荷で代金七百六十二圓六十六錢當日の最高二圓六錢最低一圓五十錢平均一圓八十一錢で累計三萬八千五百九十一貫四百二十丸此後原三玉戸主平重長男高木海夫假名(二)は昨年八月平の總額七萬三千二百二十三圓二十七錢に達した

炭礦雜夫の

雇主の物品を失敬する

出生と死亡

出生 平町字堤の内二八大家吉造長女トキ子十月五日午前四時 平町字北目町一東京府南葛飾郡龜戸町居住清水久一郎二男照義九月三十日午前七時

出生と死亡

其由申入れたるにへいこれに今日親人の命日なので佛前に備へる爲めに持つて來たのでへいでこれもおじや

梅室

草刈りの親の忌日や秋の花一本折ればみなう

碧川

折られ行く友枝を悲しむのさるにても優しく床しき人

花

取残される自分共を歎くのころやと感心して居るのか余りのいちらしさに折と向ふの方に又々一むらす

炭礦雜夫の

雇主の物品を失敬する

悪い手癖

大工の弟子

十三才頃から

未忍るべき

出生と死亡

出生 平町字堤の内二八大家吉造長女トキ子十月五日午前四時 平町字北目町一東京府南葛飾郡龜戸町居住清水久一郎二男照義九月三十日午前七時

出生と死亡

其由申入れたるにへいこれに今日親人の命日なので佛前に備へる爲めに持つて來たのでへいでこれもおじや

梅室

草刈りの親の忌日や秋の花一本折ればみなう

碧川

折られ行く友枝を悲しむのさるにても優しく床しき人

花

取残される自分共を歎くのころやと感心して居るのか余りのいちらしさに折と向ふの方に又々一むらす

炭礦雜夫の

雇主の物品を失敬する

悪い手癖

大工の弟子

十三才頃から

未忍るべき

出生と死亡

出生 平町字堤の内二八大家吉造長女トキ子十月五日午前四時 平町字北目町一東京府南葛飾郡龜戸町居住清水久一郎二男照義九月三十日午前七時

出生と死亡

其由申入れたるにへいこれに今日親人の命日なので佛前に備へる爲めに持つて來たのでへいでこれもおじや

梅室

草刈りの親の忌日や秋の花一本折ればみなう

碧川

折られ行く友枝を悲しむのさるにても優しく床しき人

花

取残される自分共を歎くのころやと感心して居るのか余りのいちらしさに折と向ふの方に又々一むらす

